

新型インフルエンザ顛末記

和田孫博

学校運営では突発事態に常に備えるリスク管理が重要であるが、通常起こるのは生徒の怪我や気象警報や交通機関の遅延など一過性のものが多い。これらに対する対応はある程度マニュアル化され、それに従ってその場を凌げばまた日常に戻る。しかし、二〇〇九年度の新型インフルエンザ騒動はそういう対応はできず、ほぼ一年にわたって振り回される結果となった。

春休みにはまだ、外国で新種の豚インフルエンザが拡がっているという報道はあったが、あくまでも対岸の火事だと受け止めていた。四月になって世間にはわかには騒がしくなった。メキシコやアメリカから帰国した人の中に感染者が出たからだった。成田や羽田をはじめ、全国の空港で検疫が強化された。防毒マスクを被った検疫官が到着機に乗り込む映像は非常な不安を煽り立てるに十分であった。各学校には文科省から、鳥インフルエンザを想定したマニュアルに従って、万一都道府県の児童生徒の中に一人でも感染者が出た場合にはその都道府県の学校をすべて休校する措置を講ずる可能性がある旨の通知が届き、新学期早々、戦々恐々とする日々が始まった。

幸い、五月連休中の文化祭、連休明けの高校二年の修学旅行は無事終了したが、五月十五日の金曜日に衝撃のニュースが流れた。神戸市東部の高校で複数の感染者が確認されたというのだ。翌朝のニュースでは、神戸市は市東部の学校を休校とすることを検討しているということであった。本校は該当地区にあり、私学とはいえ市や県の決定には従わねばならない。その日は授業がなかったが、翌週の月曜日からは中間考査が組まれていた。県の教育課に連絡を取ると、話題となっている高校以外にもその高校と生徒の交流があった複数の学校で感染者が確認されたので、もう少し広域に休校要請を出す予定であるということであった。午後一時より緊急の対策職員会議を開いた。そこで、県からの休校要請はまだ出ていないが、本校の判断で一週間の休校とし中間試験をそのまま一週間延期することを決め、学年担任団が手分けして連絡網を回した。県からの正式要請が届いたのは午後五時半近くになってからであった。

緊急の連絡に備えて、県から学校への通知は僕の自宅のメールアドレスにも届くように設

定して帰宅したが、はたして夜の九時になって、翌朝九時までに全校生の健康状態を報告せよというメールが届いた。教育課も大混乱だったのだろうが、土曜の夜遅くに全校で発熱者が何人いるか把握せよというのは無茶な話だし、第一そのメールに気づいていない学校の方が多かったのではなかろうか。僕は困った挙げ句、朝になってから養護教諭宅に電話をして、金曜日に発熱等での欠席者がいたかを問い合わせたところ、無しという返事だったので、その旨を自宅からファックスで報告した。

月曜に全校生に健康調査票を送付し、次に登校する際、休校中に発熱症状がなかったかなどを記入させて持参させることにした。火曜には、五月下旬に予定されている中学三年の野外活動旅行を強行するかどうかの学年会議が開かれた。この状況で神戸からの学生旅行を快く受け入れてくれないのではという危惧や、マスク着用者が通勤電車で七割を越すような状況で、電車やバスを集団で乗り継いで行くのはまずいのではという意見が大勢を占め、二学期に延期することを決定。生徒が作成した旅の葉が印刷所から届けられた直後のことであった。

翌週、授業再開。幸い本校では一学期の間、一人の感染者も出なかった。六月中旬の甲南中・高との定期戦も無事実施でき、やがて期末考査が終わり、五月の大騒ぎは空騒ぎだったなという印象のまま夏休みに入った。ただ、五月の一週間分を取り戻すため、八月最後の四日間、補充授業をすることだけが例年と違っていた。

七月十九日、高校一年の四十人余りが英国へ異文化研修に出かけた。英国の語学研修業者に委託して、パブリックスクールの寮を宿舎にし、他国からの受講者に交じって二週間あまりを過ごすという毎年の企画である。関西空港から出発したときは全員元気だったのだが、研修も終盤となったある夜、付き添いの教員から二人がインフルエンザ症状だという電話が入った。研修先にはナースセンターがあり、その指示ですでにタミフルの服用を始めているという。英国では七月末にいわゆるパンデミック状態となり、英国人を含むすべての感染を疑われる人は、電話で担当役所に相談してファックス等でタミフルの処方箋を受け取るという方針が決められ、ここのナースセンターもそれに従ったに過ぎないということであった。翌日にロンドンに移動し、その次の日に帰国の途につく予定なのだが、二人を連れて帰るか現地に暫く留めるか判断をして欲しいというのだが、もう一日様子を見て現地の判断で残留と決めてもよいという指示を出して電話を切り、当該生徒の保護者に事情説明の電話を入れた。

結局、二人は念のため付き添い教員とともに三日間の残留となり、本隊は旅行社の添乗員とともに戻ってきた。その本隊の中にも帰国の機内で発熱する者が複数出て、関西空港で全員が健康調査を受け一時間近く足止めされるという事態だった。三日後、残留者の出迎えに再び空港に行った際、その旅行社の海外研修を取り纏めている担当者が、英国でも豪州でも感染者が続出で、もう一週間以上二十四時間対応に追われていると嘆いていたのが印象的だった。

八月末の補充授業が終わり、九月一日に二学期が始まる頃までには、国内で徐々に感染が拡大していき、文科省から示される臨時休業基準も季節性インフルエンザとほぼ同様レベルに緩和された。その代わり、インフルエンザ日報を作成し、毎日クラス別にインフルエンザ感染者と発熱による欠席者の数を調べ、状況に応じて適宜学級閉鎖などの処置を執ることとなった。本校では万一基準を超える数の感染生徒が出た場合、クラスによって進度に違いが出るのを避ける為、学年全体を閉鎖しようという申し合わせをした。新学期早々に高校三年で数人感染者が出たものの、その後落ち着き、九月二十日の体育祭は予定通り実施できた。しかし、連休が明けた頃から中学生を中心に急に感染者が増え、十月二日から六日まで中学三年を学年閉鎖するに至った。翌週になって十月五日から八日まで中学一年、二年も学年閉鎖を決定。七日に解除された中学三年もまだ十名程度欠席者がいるという状態。中学一年は閉鎖中にも感染者が増加、九日の金曜まで閉鎖を延長する旨、家庭への連絡に追われた。この間、中学校舎はひっそりとし、職員室では教員が家庭への連絡に追われるという異常な雰囲気だった。

その後、少し落ち着いたかなと思う間もなく、中間考査三日目の十月二十一日に中学一年四組で欠席者が十二名にのぼり、二十五日までの学級閉鎖を決定。翌二十二日には中学二年一組も同様の処置を執ることとなった。進路を揃えるために学年閉鎖をという考え方は、この状態が続けばかなり長期にわたり影響が出るという判断によって、被害を最小限に留めるため学級単位の閉鎖とするという考え方に転ぜざるを得なくなった。

そんな中、五月から延期された中学三年生の野外活動旅行は決行することとなった。十月三十一日の出発時には感染者は一人もないということであった。しかし到着後早速数名が発熱。翌日二名、さらに次の日に一名が本隊を離れ帰神。最終日には四名が別行動で早期帰着という有様だった。そして直後の十一月四日から三年四組が五日間の学級閉鎖を余儀なくされた。

これをピークに徐々に下火になり、十一月下旬にはほぼ沈静化したが、二ヶ月余りの間は職員室の黒板に貼られたインフルエンザ日報を眺めながら溜息をつく毎日であった。

その間にも大きな課題があった。一月・二月に実施される本校の入学試験への対応である。例年は、健康状態が悪い受験生に別室受験で対応するが、別の受験機会は設けていなかった。しかし、新型インフルエンザ感染者もこれと同じ対応でいいのか、無理をして受験するために交通機関で感染を広めることにならないか、別室受験として誰が監督するのかなどいろいろ議論が出た。しかし、受験者数が数百人程度なのに、別の受験機会を作りしかも問題のレベルを揃え公平性を担保することは不可能という結論に達し、通常の風邪などの受験者用の別室とインフルエンザ感染者用の別室を設けることとした。幸い、冬に再び感染が拡大するという厚労省の見通しは外れ、インフルエンザ用の別室は使わずに済んだが、来年以降も同様の対応を取るのかどうか、これから検討しようと思っている。

以上が私の勤める学校でのインフルエンザ騒動の顛末である。この経験から何が得られたのかはよく分からないというのが正直なところだが、状況判断を的確に行い、臨機応変の対応をするしか仕方がないということだろうか。危機管理マニュアルを整備することは重要だが、マニュアル通り行かないことが次々に起こってくるのが危機状態の常であるということであらためて思い知らされた一年だった。最後に三月末現在、中学生の既感染率は四八%、高校生は二六%となっていることを付け加えておく。